



# ごみ日和

～みんなでごみゼロ～

No.47 2011.春

## アルピニスト 野口 健さん / “山が好き” この気持ちが全ての原点

「京都」僕にとって京都は、自分の将来が見えず思い悩んでいた高校一年生の頃に、一人ふらふらと歩いた街。その時、たまたま書店で手にした本が、冒険家・植村直己さんの『青春を山に賭けて』でした。“落ちこぼれだった私がエベレスト登頂を果たした…”、植村さんのメッセージに僕の胸は熱くなりました。僕も山に登りたい!それからというもの、自分のために無我夢中で山に登り続けました。

僕が山のごみ問題、さらには環境問題に取り組むようになったのは今から12年程前ですが、山に登り始めた頃には、まさか自分がこんな活動をするなんて夢にも思っていませんでした。きっかけは、エベレスト登頂を目指す中で、ごみだらけのエベレストの姿を目の当たりにしたこと、また海外の登山家から“日本人の出たごみが一番多い”と厳しい指摘を受けたこと、さらには富士山を“世界で一番汚い山”と言われたことでした。このままではいけない、山をきれいにしよ、と日本人としての自尊心が目覚めた僕は、富士山の清掃活動を始めたのです。しかし、当初は困難の連続でした。協力者がなかなか集まらない、さらに“富士山が世界遺産になったら入山規制が掛かり、観光客が減ってしまうのではないか”など、地元住民から反対の声も上がりました。環境問題とは、つまり人間社会の問題だということに気付いたのです。僕としては、ただただ山をきれいにしたいだけなのに…。そんなジレンマに陥りましたが、ちょっと見方を変えれば、この活動は“夢”があるなあと感じたんです。どうい社会をみんなで創っていけば良いのか、いろんな意見があつて大変でしたが、人間は夢があると、どんなにしんどくても活動を続けることができます。ただごみを拾うだけでは根本的な解決にはなりません。ごみが出ない社会をどうやって作っていくのか、それには環境省や市町村をはじめ、地域の市民や企業などを巻き込んで、みんなで考えていしか解決策はありません。まさに、環境の“環(わ)”の字の通り、一部の人間がやる活動ではなく、みんなで取り組むからこそ意義のある活動なのです。



また、これは僕が山に登り続ける中で実感したことです。山とごみの関係には面白い法則があつて、山頂付近では登山者同士が「こんにちわ!」と挨拶をしながらすれ違い、ごみはほとんど落ちていません。人と人が挨拶をするということは、人と人との繋がりを大事にするということですから、ポイ捨てをする人はまずいません。しかし、ふもとまで下りてくると途端に挨拶は減つてごみが多くなる。特に富士山をはじめ、観光地のごみ問題は深刻でした。現在は、山の清掃活動に対する社会の認知も高まり、ごみを持ち帰ったり、目に付いたごみを拾い集めてくださる方が増えました。5年10年と地道に続けてきた活動が、少しずつ人々の意識を変えていることは嬉しい限りです。さらに、山に限らず地元の人々から大事にされている地域は、ごみも少なくきれいです。逆も然りです。清掃活動を通して僕が経験してきたことを、メディアを通していろんな方に伝えることも大切な使命だと思っています。

それから、子どもたちに自然の素晴らしさを伝えるために環境学校を開いていますが、最近ではインターネットなどの影響もあり、子どもたちの環境問題に対する“知識”は驚くほどあります。しかし、いくら「京都議定書」や「CO2」と答えられても、自然との接点がなければそれは“知識”でしかありません。僕のように、山が好き!だからその山をきれいにしたい、ごみをなくすにはどうすればいいのだろうかと思つて試行錯誤する。現場を知り、心で感じることで初めて、自然に行動ができるようになると思うのです。とにかく、今を生きる子どもたちには自然との接点を持って欲しい。日本には素晴らしい自然があちこちに残っています。自分たちが住んでいる地域にも、こんなに素敵な自然があつたんだと知ること、自分たちの地域に誇りを感じ、もっともっと好きになります。例えば、毎日通っている通学路を、ごみを拾いながら歩いてみてください。周りの様子をよく知っている気持ちになっていますが、ごみを拾いながら歩くと普段とは視線が変わつて、いつもは気にも留めない所が非常に多いことに気がきます。垣根や塀の向こう、またベンチの下などを覗いてみてください。ごみ拾いが地域をもっと良く知ること、好きになることに繋がれば、その意味はさらに広がってきますね。



2月13日もらったくない! OBAKE  
キャンペーン中、商店街でお買い物

取材日:平成23年2月4日  
聞き手:松村 香代子



京都精華大学 デザイン学部建築学科 准教授 株式会社応用芸術研究所 代表取締役 所長 片木 孝治

### 芸術が社会に貢献できることとは何か？

私はここ数年、京都精華大学で芸術・デザインを学ぶ学生達と共に『表現（≒芸術）分野の新しい枠組み』について考えるいくつかのプロジェクトを実践してきました。一般的に、芸術やアートというと“非日常空間（美術館やギャラリー等）の中にあるモノ”といった印象を持たれる方も少なくないでしょう。しかし、ここで紹介する取組では「芸術という枠組み」を“日常空間（環境活動や地域社会など）”の中に持ち込むことで、これまでとは異なった角度から「芸術と日常」双方に進展的な可能性を見出そうという試みを進めています。

### 環境活動とアート（出町エコ商店街～）

その活動例として「エコ商店街事業（主催：京都市ごみ減量推進会議+各商店街）」があります。この活動は、京都市ごみ減量推進会議が2R型エコタウン構築事業の一環として、2R（リデュース・リユース）を軸に、京都市内の商店街（出町商店街：2007～、北野商店街：2010～）をエコ活動の舞台に「商店街＝各店舗が発信者」となり“お客様である消費者＝市民”へごみの減量（レジ袋の辞退など）を促す”というように、チラシや宣伝だけによる啓発ではなく、商店街の皆さんが「人と人のコミュニケーション力」で、日常の対話の中から進めるユニークな環境活動です。

さて、私達の取組はこの活動基盤に「芸術という枠組み」を当てはめる意味（＝効用）を考えるとところから始まりました。

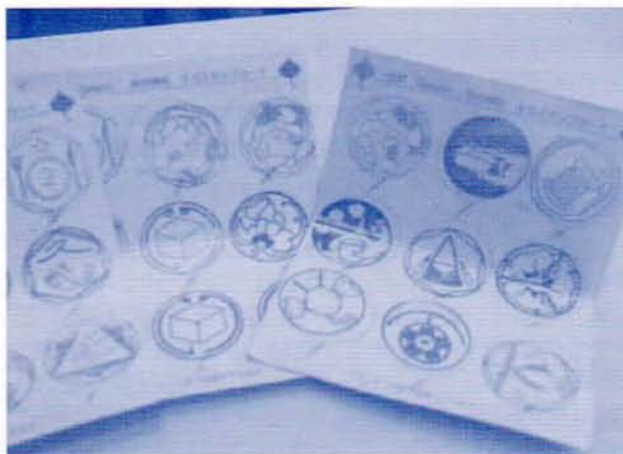
商店街の方々とのヒアリングから《オリジナリティー／直感性のあるもの／子供達が喜ぶもの》といったキーワードを引き出し、そこに利便性だけでは解決できない「楽しみ＝アート」という着地点を共有しました。これらを踏まえて複数のアートな仕掛けを実施しましたが、その中でも「エコスタンプ事業」は、環境活動／アート活動双方の中核となりました。

参加する各店舗が1エコ（レジ袋の辞退など）1スタンプの実施にあたり、押印されるスタンプが店舗ごとに異なる絵柄（＝アート）として商店街に準備されました。その反響は「あのお店はこんな絵柄だった」「絵柄はお店ごとに違うのね」と、エコの

話とアートの話がお客様と商店街を結びました。また「このお店はどんな絵柄？」と子どもたちからの声も多く寄せられたとのことで「当店もエコスタンプ事業に参加します」と新たに参加を表明された店舗も増え（20店舗強）、スタンプ柄を集める楽しみが、環境活動を支援する一面を見せました。他の場面でも、アートという角度の視点で、提案する度に「それ、楽しそう！」「これも良いなあ」と、ちょっと疲れた現代の日常に、少しの非日常（アート）が関与することで、地域社会（日常会話など）を明るくする鏝【かすがい】として、アートが担える可能性を見出しました。「〇〇とアート」の取組は始まったばかりですが「芸術が社会に貢献できることとは何か？」についてこれからも探求したいと思います。



エコ商店街の取組（出町商店街）



エコスタンプ



## 「環境を守ることは“関係を大事にすること”やったんや!!」 ～室町児童館の子どもたちとの環境学習レポート～

京都市では、小学校高学年になると京エコロジーセンター（以下エコセン）での環境学習をはじめ、各学校での環境保全活動や啓発活動など、授業の一環として環境について学ぶカリキュラムが組まれています。それに加え、小学校低学年の児童にも、環境について分かりやすく学ぶ機会が必要ではないか、という声が教育現場や地域で環境活動を推進されている方から寄せられています。そこで今回は、室町児童館で開催された、低学年を対象とした環境学習の実践例の一部を紹介すると共に、その成果について考えます。

「おはようございます!」。午前10時、室町児童館に通う小学1年から3年生の子どもたち50名余りが、2階の教室に揃いました。見慣れない大人たちを前に、少々緊張気味です。「おはようございます!!」本日の先生である澤田智茂さんが、大きな声で子どもたちに微笑みます。子どもたちも負けずに大きな声で挨拶に応えます。さあ、これから楽しい遊びが始まるのかな?それとも難しい勉強が始まるのかな?子どもたちはまだ不安な様子。



澤田さん登場

「みんなは“エコ”っていう言葉を聞いたことがあるかな?」澤田さんのこんな質問に、子どもたちの多くから「知ってるで〜!」「環境のことやろう?」など、様々な反応がありました。「じゃあ、エコのことを説明できる人は?」……先程の熱気とは打って変わって、自信がなさそうに3名程が手を挙げてくれました。「エコって地球を大事にすること?じゃあ、実際にはどんなことをしたらいいのかな?」何やら難しい話になってきました。子どもたちは上手く言葉にできず



空気・木・動物など、子どもたちが前に登場

にもじもじしています。さてここからが本題。長年、幼児から社会人まで幅広い年齢層を対象に、ユニークな環境学習プログラムを提案されている澤田さんが、テンポよく子どもたちに語りかけます。「みんな、環境ってな、ぼくらの周りにあるもの、全てが“環境”やねん。今ぼくらの周りに何がある?—そうそう、友達がおるなあ。もし友達同士がけんかしたらどうなる?」子どもたちは、なあんだ、そんなことならぼくらでも分かるよ、とまた口ぐちに話し始めます。「むしろしゃして、おもちゃや本を壊したり、人を叩いたりしたら、とっても嫌な気持ちになるよね。ぼくらの周りの人や物を大切にすること、つまり周りとの関係を大切にすることが、実は環境を大切にすることに繋がっているんだよ!」子どもたちは、へえ、そうやったんか!という驚きの表情。「じゃあ、関係を大切にするためにはどうすればいいか、みんなで身体を動かしながら考えてみよう!」

こんな言葉のキャッチボールの後、澤田さんは子どもたちに“自分たちの周りにあるもの”を一つずつ挙げさせ、答えてくれた人にはその絵が描かれたカードを渡していきました。空気・水・木(植物)・虫・動物・魚・鳥・石・そして人。子どもたちの答えはどんどん出てきました。次に、“私”という存在とそれらとの関係性、例えば“私と空気の関係”について子どもたちに問いかけました。

「空気が無いと息ができない!」子どもたちは大きな声で答えてくれます。じゃあ、私と水の関係は?私と木は?質問はどんどん続きます。木と虫との関係は?虫と鳥では?澤田さんは、関係性のあるもの同士を、白いビニール紐で繋いでいきます。子どもたちは、



## シリーズ

### 「みんなで考える」

時に食べ物となり、すみかとなり、また道具ともなる、“もの”と“もの”との関係性を的確に、そしてユニークな発想を交えて答えてくれました。

あっという間に、ビニル紐は蜘蛛の巣のように絡み合い、互いの存在が、複雑且つ絶妙なバランスで関係していることを物語っていました。その紐を少しでも強く引っ張ると、つまり他のものを独り占めすると、たちまちバランスは崩れ、互いの関係性を修復することが難しくなります。澤田さんはこの疑似体験を通して、私たちの周りの環境は全て繋がっていること、そのため、それらの関係性を理解し、バランスを崩さないように配慮することが環境保全に繋がるということ、子どもたちに無理なく丁寧に伝えて下さったのです。

今回の取組は、環境学習への熱意をお持ちだった室町児童館の楠館長の想いと、室町地域で長年環境活動を推進されている織田英夫さん(室町地域ごみ減量推進会議 会長)の想いが共鳴することで始まりました。一方、日々環境への意識啓発に取り組む上京エコまちステーションのスタッフも、小さな子どもた



見事な蜘蛛の巣(関係性の可視化)ができたところ



後半のゲームで沢山の子どもたちが腕を組んで立ち上がっているところ

ちに何か働きかけができないかと考えており、児童館からの相談を受け、エコセンに協力を依頼することで、この素晴らしいプログラムが実現しました。地域・行政・教育機関との連携によって、主役である子どもたちに良質な体験を届けることができたのです。

「児童館は人を育てるところです。」今回のプログラムを振り返って、澤田さんがそうおっしゃいました。子どもたち一人ひとりが大切にされていると感じ、安心できる場作りこそが、前に立つ大人に求められていることだとも教えてくれました。児童館での本格的な環境学習はまだ始まったばかりです。来年度も室町児童館での取組が継続することを、そして他の児童館でもこのような取組に対する機運が高まることを、一参加者として願わずにはいられません。

取材日:平成23年1月6日  
取材:松村 香代子

#### — 今回の取組内容 —

日時:平成23年1月6日 午前10時~12時  
場所:室町児童館  
内容:小学1年~3年生向け環境学習  
講師:澤田智茂 (Pulsate主宰)  
主催:室町児童館  
室町地域ごみ減量推進会議  
協力:上京エコまちステーション(企画)  
京エコロジーセンター(講師派遣)

#### — 環境学習についてのお問い合わせ先 —

みやこ  
京エコロジーセンター  
(京都市環境保全活動センター)

〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町 13  
TEL:075(641)0911  
FAX:075(641)0912  
<http://www.miyako-eco.jp/>



### 地域の知恵とパワーが集結！ 環境フェスタ2011 in アルプラザ醍醐

市内伏見区醍醐地域で毎年開催される環境フェスタ。会場となるアルプラザ醍醐は地下鉄醍醐駅からのアクセスも良く、週末はたくさんの買い物客で賑わいます。



吉村会長（右）と運営委員の皆様

この環境フェスタを立ち上げたのは、長年この地域で社会福祉や環境活動を続けていらっしゃる、醍醐西地域ごみ減量推進会議会長の吉村睦子さん。吉村さんが活動呼びかけられ、春日野、日

野、小栗栖宮山学区にも地域ごみ減量推進会議（以下、地域ごみ減）の輪が広がり、日々熱心な活動が続いています。今回のイベントは、「伏見区地域ごみ減量推進会議」の取組の一環として、「地球にやさしく、今私たちにできること」をメインテーマに、「もったいない」を改めて考えていただく機会として、この4つの地域ごみ減が協働で環境フェスタ運営委員会を設立。14にも及ぶ市民団体・行政機関の協力を得て、広く市民に向けて啓発活動や日頃の活動の成果報告を行いました。

まず、会場内でひと際目を引いたのが、醍醐西小学校の3年生の子どもたちが一生懸命考えた「エコ標語」です。醍醐エコまちステーション\*の協力の下、醍醐西地域ごみ減が中心となって、地元の子もたちと一緒に地域の落ち葉を集め、それを堆



醍醐西小学校によるエコ標語

肥化し、森の宝物である落ち葉の役割や自然の循環の仕組みについて学びました。さらに、今年の春先からはこの落ち葉堆肥を使ってカブトムシの幼虫を育ててみようという子どもたちの「お楽しみ」が待っています。「醍醐西 e~na（え~な）プロジェクト」と名付けられたこの取組には、子どもたちが豊かな体験を通して学んだことを、毎日の暮らしの中でどんどん実行して欲しいという、地域の皆さんの願いが込められています。子どもたちは素直に、しかし大人も



紙芝居上演の様子  
（醍醐西バンブーグループ）

顔負けするほどに鋭く、このプロジェクトを通して考えたこと、発見したことを標語にしてくれました。「あっ、ぼくのが載ってる!」「ほんまや、おれのもあるで!」標語を書いた子どもたちが、少し恥ずかしそうに、でも自信たっぷりに、自分たちの作品を家族や友達に見せ



針金工作の様子（シニア元気の会）

合っていました。「このプロジェクトで得た体験が家庭にも広がり、脈々と生活の知恵が受け継がれていくことが、何よりも地域づくりにおいて大切」と吉村会長は教えて下さいました。

会場には、醍醐西バンブーグループによる手作りの環境紙芝居の

上演や、シニア元気の会による針金工作、また京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会による牛乳パックで作る工作教室など、子どもたちの好奇心をくすぐる内容が盛りだくさん。皆さん「物作りの楽しさを伝えたい」、「ごみとして捨てる前に一工夫する気持ちを育てたい」など、それぞれの想いを胸に子どもたちと向き合っていました。また、「Do You Kyoto?（環境にいいことしてますか?）」が合言葉の人気キャラクター・エコちゃんや、黄色いごみ袋でもお馴染みのキャラクター・ここみちゃんの着ぐるみも登場し、会場は大いに賑わいました。



エコちゃん・ここみちゃんと子どもたち

いま、醍醐地域には、「自分たちで目標や楽しさを見つけて活動をするグループ」がたくさん生まれています。たとえ小さなグループでも良い、やりたいことをやれる仲間と一緒にその想いを実行に移すことが、地域づくりに欠かせない原動力だと吉村会長は話します。「イベントの時だけ集まって、それが終わったら活動も無くなってしまふ、一発だけの打ち上げ花火ではあかんと思うんです。一つひとつのグループは小さくても、それぞれの花火を一緒に打ち上げたらええ、みんなで協力したらええんです。私はそのグループ同士を繋げ、更にその輪を市民の皆さんへと繋ぐ、そのお手伝いをさせてもろてます。」なるほど、参加協力団体が14にものぼる理由が分かりました。昨年4月に設立された醍醐エコまちステーションも、醍醐地域の活性化を全面的にバックアップしています。

「地域のきずなを深めるには、ちょっとした知恵と行動力、そして予算が確保できるかどうかも重要です。その意味でも、行政や地域の小学校などと充分なコミュニケーションを取り、魅力ある地域をみんなで創っていくんだという意識の共有が必要ですね。」吉村会長の力強い微笑みは、これからも多くの人の心に花を咲かせるに違いありません。

＊注釈：エコまちステーション…平成22年4月1日に、地域における総合的な環境行政の拠点窓口として「エコまちステーション」が区役所・支所内に開設されました。詳しくは、会報誌 No.44、または環境政策局循環型社会推進部 まち美化推進課 TEL:075-213-4960 までお問い合わせください。

ホームページ <http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/page/0000077660.html>

取材日：平成23年1月22日  
取材：松村 香代子



## 知っていますか？こんなマーク

様々な製品に付けられているマークやラベル。  
皆さん、どれくらいご存知ですか？

マークはみたことあるけど、  
内容までは・・・というの  
あるかな？



### ◆エコマーク◆

ライフサイクル全体を通して環境への負荷が少なく、環境保全に役立つと認められた商品に表示。

\*4,904 商品 (2010年12月末現在)



### ◆グリーンマーク◆

古紙を、原則として40%以上原料に利用した製品（トイレトーパーは100%、コピー用紙と新聞用紙は50%以上）に表示。

\*583 商品 (2011年2月現在)



### ◆省エネ性マーク◆

省エネ法により定められた省エネ基準を達成している製品には緑のマークを、達成していない製品には橙色のマークを表示。

\*エアコン・冷蔵庫などの家電 18 品目 (2011年2月現在)



### ◆牛乳パック再利用マーク◆

市民の手で作られ、育てられてきたマークで、使用済み牛乳パックを再利用して作られた商品に表示。

\*パックマークメーカー 22 社の紙製品など 20 品目 (2010年12月末現在)



### ◆間伐材マーク◆

間伐や間伐材利用の重要性などをPRし、間伐材を用いた製品に表示。

\*認定企業 180 社 (2011年2月現在)



### ◆PET ボトルリサイクル奨励マーク◆

自治体又は事業系ルートで回収され、国内で再商品化されたフレーク、ペレットまたはパウダーが25%以上原料として使用されており、商品の主要構成部材として利用されているものに表示。

\*314 商品 (2010年3月末現在)



### ◆海のエコラベル◆

持続可能で適切に管理されていることが認証された漁業で獲られた水産物に表示。

\*製品数 約 200 品目 (2010年12月末現在)



### ◆エコレールマーク◆

流通過程において、環境に優しい鉄道貨物輸送に取り組んでいる企業や商品に認められているマーク。

\*商品 120 品目、取組企業 67 社、協賛企業 14 社 (2010年10月末現在)

子どもたちも大好きなお菓子や、家族でしっかり食べたいお魚、みんなが使うトイレトーパーなど、身近な商品にこれらのマークがついています。お買い物の時に、探して、選んで下さいね！！



## 事務局より

「エコ」と名のつくイベントが、市内のあちこちで年中開催されています。主催者の様々な思いが込められているイベントですが、参加者である市民の皆さんにどれだけ伝わっているのかな～とちょっと不安に思うこともあります。多数のイベントの中から、ちょっと興味があるな、これならできそうだな、というものがあれば、是非、足を運んでもらえるとうれしいです！

京都市ごみ減量推進会議会報誌 ごみ日和

No.47

〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13  
京エコロジーセンター活動支援室内  
TEL:075-647-3444 / FAX:075-641-2971  
E-mail:gomigen@mbox.kyoto-inet.or.jp  
URL:<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gomigen/index.html>

🔍 ゴミゲン・ネット

🔍 検索 検索出来ます

### 【入会のご案内】

京都市ごみ減量推進会議は、京都市のごみを減らし、環境を大切にしたいまちと暮らしの実現に寄与することを目的として、市民団体、事業者、行政により1996年11月に設立した団体です。パートナーシップで多彩な活動を展開中。京都市ごみ減量推進会議では、ともに活動をする会員を募っています。詳細は、事務局へ問い合わせください。TEL: 075-647-3444

企画編集:京都市ごみ減量推進会議 普及啓発実行委員会  
(会報誌・ホームページ小委員会)